

宮沢賢治『土神ときつね』の特異性

—よだかとブドリの自己犠牲との関連において—

セト ラジャディーブ
SETH Rajdeep

キーワード 宮沢賢治、童話、自己犠牲、『土神ときつね』、ブドリとよだか

1. はじめに

宮沢賢治（1896～1933）は、岩手県の詩人・童話作家である。現在でも子供向けの童話として、絵本などが出版されている。1918（大正7）年22歳の時から童話創作に取り組み、1921（大正10）年1月23日から同年9月初旬までの東京にいた間、賢治は弟の清六の言葉でいうと、「爆発するような勢いで童話を書いた」。ただし、ほとんどが生前未発表のため、はっきりとした作品の成立年代が分からないものが多い。更に、作品によっては初めに書いた草案から最終稿まで、かなりの年月をかけて加筆訂正しているものもある。

その中でも、『土神ときつね』は明らかに登場人物の恋愛感情を扱った作品である。¹そして、恋愛を扱う童話として異色の作品であると小沢俊郎は述べた。²しかし、この作品の異様な展開や結末は、単なる恋愛の問題として片付けることはできない。

そこで、本論文では『土神ときつね』から窺える賢治の内面で起こっていた二つの対立の可能性を指摘する。その対立と賢治の自己犠牲という死の描き方を関連させることで、なぜ賢治の童話が土神の殺人という異様な結末へと向かってしまったのかという点について論じる。自己犠牲が見られる作品としては、ここでは筆者が修士論文で扱った作品群から『よだかの星』と『グスコブドリの伝記』の二作品を取り上げている。³

2. 「死」の描き方：二つの自己犠牲

自己犠牲とは、自分の身命を捧げて他者に尽くすこと、目的を達成するために自分の身命を顧みないということである。賢治の作品における自己犠牲の場合、自分の身命だけではなく欲や感情も昇華し、他者に尽くすということが含

まれると定義できよう。まず、宮沢賢治の描く自己犠牲の死とはどのようなものかを知るために、『よだかの星』と『グスコブドリの伝記』について論じる。

賢治が6才から11才の間に、東北では大きな飢饉が何度も起こっていた。⁴ 飢饉に密接な関係のある農業に注目した賢治が、死や飢えについて考えていたであろうことは明らかである。このような精神は、特に『グスコブドリの伝記』（1932（昭和7）年3月10日発行）に反映されている。そして、その結末は自己犠牲という形の死で終わっているのである。

この話の主人公は、妹と引き離されてしまう。主人公は、農民たちのために科学的なやり方を取り入れて、農作物を病から救おうと決める。農民から誤解され襲われることもあったが、空から肥料を撒くというやり方で農作物を救い、しばらくは上手くいく。そして、ブドリは、唯一の家族である妹とも再会できた。しかし、ブドリが27歳の頃、恐ろしい冷害がやってくることが分かり、回避するための方法は火山島を爆発させて大気の状態を変えることであった。みんなのために、ブドリは一人で火山島に残り火山を爆発させ、自らが犠牲となる。

この童話について、岡屋昭雄が「賢治の東北の碎石工場の仕事での挫折、羅須地人協会で理想が実現しなかった等々、」 「賢治自身の生活とのかかわりが重要なモメントになっていることが重要」と述べているように、この賢治と主人公ブドリには少なからず共通点がある。⁵ また、妹と引き離されるという点に関しても現実に1922（大正11）年11月27日には最愛の妹トシが24歳の若さで亡くなっている。賢治は、物語のように妹と引き離されて、この物語のように再会できることを望んでいた。妹の「死」は賢治にとって大きな衝撃であり、この衝撃が詩にも「苦悩」という形で表現されているということは、既に指摘されている。⁶

この物語は賢治の伝記的事実を含みつつ、物語の全ては「イーハトーブ」という場所で起こっているとされている。「イーハトーブ」について、賢治は『注文の多い料理店』の刊行案内で次のように書いている。

「イーハトーブは一つの地名である。強てその地点を求むるならばそれは、大小クラウドたちの耕してゐた、野原や、少女アリスが辿った鏡の国と同じ世界の中、テパンタール砂漠の遙かな北東、イヴン王国の遠い東と考へられる。

実にこれは著者の心象中に、この様な状景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である。

そこではあらゆる事が可能である。』⁷

ここで書かれているように、「イーハトーブ」は空想の世界であると同時に、賢治の心象中の岩手県でもある。

つまり、賢治の経験や生きている場所・岩手県と「イーハトーブ」は、賢治の心の中で重なる部分があるという説明である。このことから、現実が起こった経験や出来事を元に、賢治の精神が映し出された作品であると言える。恩田逸夫が言うように、この作品が作者の環境と素質が最も現れる〈作者自身が物語る自伝的作品〉に該当することは確かであろう。⁸

この『ダスコブドリの伝記』の中で、現実ではなく明らかに空想的である部分として、主人公ブドリの“死”の描き方がある。ブドリは死ぬことで、一生懸命働く農家の人々を救う。それだけではなく、特に飢饉でブドリと同じ運命になりそうな子供達を救ったことが重要である。童話は、こう終わる。

「そしてちやうど、このお話のはじまりのやうになる^{はず}の、たくさんのブドリのお父さんやお母さんは、たくさんのブドリやネリといつしよに、その冬を暖いたべものと、明るい薪^{たきぎ}で楽しく暮すことができたのでした。」⁹

ブドリは、農家、子供達、良い食べ物、皆が生きていくことのために命を捧げた。皆を救うために、自分の命を顧みず死を選んだのである。この主人公の死は、自分の命と引き換えに誰かを救う“自己犠牲的な死”であると言える。

賢治の人生のモチーフが他の作品よりも顕著に出ている作品であると述べたが、千葉一幹はこの作品のブドリの死は他の作品に比べて「美しすぎる」と述べた。他作品の死をみると、例えばよだかの《血のついた》くちばしが《横にまが》っているという記述や『なめとこ山の熊』の小十郎や『オツベルと象』のオツベルの死とその原因とのズレが、読者に〈異和〉を感じさせ割り切れぬ想いを抱かせる。そして、この〈異和〉によって読者は何度も読み返すという。だが、この〈異和〉がブドリの死にはないというのである。¹⁰

では、なぜブドリはこれまでの〈異和〉を失った「美しすぎる」結末になったのか。当時、賢治は病に倒れて死を目前にしていた。¹¹そして、子供向け雑誌『児童文学』に寄稿するために書いていた。¹²子供を意識して書いていたことは勿論だが、千葉一幹も指摘したように、賢治自身が自分の死を覚悟していたという意識の影響は避けることが出来ないだろう。¹³やはり賢治が死を目前に意識したことで、これまでの人生と究極の理想の生き方が反映され、美しすぎるブドリの人生が完成したのではないだろうか。

もう一つ、自己犠牲の死を含んだ作品として『よだかの星』が挙げられる。この作品は、1921（大正10）年頃執筆と推定されている。生前未発表であり、賢治の初期の作品である。

この童話の解釈として、よだかの食べることへの罪意識を宗教的な原罪ととらえ、仏教的思想と結びつけて考えられることが多い。¹⁴実際に、賢治が動物を食べることを苦痛と感じていたことも明らかになっている。『ピチテリアン大祭』における「私」という人物の答弁では、仏教では生まれ変わるという考えがあるため、動物も昔の兄弟かもしれないということを主張し、動物を食べてはいけないと述べている。ただ、賢治の家は信仰の厚い仏教徒であり、魚といった動物の肉を食べていた。賢治だけが食べることを罪のように感じて嫌がっており、賢治の場合は、食べる行為が動物を殺して自分の中に取り入れる行為であるということに対する強い嫌悪感が窺える。これらのことから、賢治の食べることへの罪悪感の特異で、賢治の感受性の強さや個人的な生き方であったのではないだろうか。

つまりこのよだかの罪の意識は、賢治が抱えていた問題と共通している。松岡幹夫が指摘するように、この作品は「自己の存在の原罪を問うところから自己犠牲の誓願を立てるところが特徴的」である。¹⁵

しかし、この作品の自己犠牲は、死ぬ直前に書いていた『グスコブドリの伝記』の自己犠牲の死とは明らかに異なる。『グスコブドリの伝記』では、死のきっかけとなる罪の意識は何もない。自分が生きるために学び、又、他の人の生命と豊かな作物のために命を投げ捨てる。

それに対して、食べるという罪を持つよだかは、生きている限り救われることがない。生き物を食べなくては生きていけない、という食物連鎖から脱出するためには、自分の命を犠牲にしなければならないのである。つまり、苦悩からの解放のための“死”である。

よだかは、「たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される」ことや鷹が自分を殺すことを辛く感じ、遠くへ行くために飛んで、星に星の世界へ連れて行ってくれと頼む。運命から逃れるために自分の命を絶ったという観点から自殺と解釈することもできるが、死ぬために遠くへ行くとは書かれていない。食べないという目的を達成するために自分の命を顧みず飛び続け、欲（この場合、食欲）や感情も昇華して、他者の命のために自分の命を棄てているのである。よだかの死には自己中心的な側面も窺えるが、やはり自己犠牲の一面を持っていると言える。

これまで述べてきたように、宮沢賢治の死の選択の特徴として「自己犠牲の死」というものがある。初期の作品『よだかの星』では、根本的には苦悩（原

罪)から自己を解放するための死であるが、解決方法として自分を犠牲にしている。しかし、後期の作品『グスコブドリの伝記』では、必死に生きる主人公が、飢饉から子供や農民を救うために命を捧げる自己犠牲であった。

初期の『よだかの星』の自己犠牲には、松岡幹夫が指摘している通り原罪と言ったブドリには見られない罪の意識が見られる。また、西田良子が指摘した通り、ブドリと比べてよだかはつらい世の中から逃げていく自己中心的な存在でもある。このように、登場人物としてのブドリとよだかは異なっている。¹⁶しかし、初期と後期のこの二作品を比べた場合、目的のため若しくは他者のために自分を犠牲にしているという点で共通しており、同じ自己犠牲というテーマがみられるのである。つまり、自己の解放のために自分を犠牲にする形(よだか)から他者を救う形(ブドリ)へと、大きく自己犠牲の形が変わっていると言えるのである。

3. 『土神ときつね』の対立

『土神ときつね』には、前章で挙げた自己犠牲の死とは全く違う死が描かれている。この作品の題名からも分かるように、初めから対立する二者が設定されている。そして、一方が殺されるのである。

『よだかの星』や『グスコブドリの伝記』といった自己犠牲の死の作品では、殺すことは解決方法にはならなかった。その上、この二つの作品では明確な対立者もなかった。殺人を引き起こすほどの激しい対立が、『土神ときつね』の特徴である。

<法華経文学>を目指した賢治自身が自己犠牲を描いたことは、仏教的な側面から説明することも出来る。しかし、相手を殺してしまう結末は、自己犠牲と反し、説明しにくい。ここで、対立する土神と狐は何を象徴しているのかを検討する。

3-1. 賢治の内面の対立

『土神ときつね』の草稿は、1923(大正12)年頃に執筆したといわれており、生前未発表である。表紙に「土神・・・退職教授 きつね・・・貧なる詩人 樺の木・・・村娘」とメモ書きされていることは注目に値する。¹⁷

この話には、“一本の綺麗な樺の木”が登場する。狐と土神は、対照的な個性を持ち、一本の綺麗な木を巡って対極に位置している。住んでいる場所は、樺の木を真ん中に狐は南の方に住み、土神は東北からやって来たり、北の森へと

逃げ帰ったりする。人間関係だけではなく、南と北・東北、物理的にも対極な位置にある。

まず、描写されている人物（性格）に注目する。樺の木は、どちらかといえば狐が好きだということを説明し、その後、語り手は次のように描写する。

「なぜなら土神の方は神といふ名こそついてはるましたがごく乱暴で髪もぼろぼろの木綿糸の束のやう眼も赤くきものだつてまるでわかめに似、いつもはだしで爪（つめ）も黒く長いのでした。ところが狐の方は大へんに上品な風で滅多に人を怒らせたり気にさはるやうなことをしなかつたのです。」¹⁸

土神は、神にもかかわらず、髪はぼろぼろで、汚い服装をしており、乱暴である。話の中で、樺の木は「どちらかと云へば狐の方が好き」だと思っていると書かれている。だが、実際の樺の木の態度は、土神を嫌悪している。土神が来ると「少し困つたやうに思ひ」落ち着かず、おろおろ声になる。後半では、はっきり迷惑に思っていることが見て取れる。そして、土神は無意識のうちに狐と自分を比べ、劣等感を抱いている。

これは、賢治の作品『よだかの星』の主人公よだかと共通した要素である。土神は、樺の木や狐に歓迎されていない。つまり、よだかも土神も疎外感を持っていて、周囲から嫌われ、認められていない。だが、どちらも内面は繊細で純粋である。よだかは、自分が他の虫を食べずにはいられないことに傷付くほど繊細である。土神は、科学的な事実を述べる狐が感じることの無いような素朴な疑問を持ち、樺の木に話しかける。樺の木と狐に対する嫉妬によって、倒れて大声で泣くほど外見のイメージとは違い、繊細である。

また、よだかと土神は、名前と実物の差が問題になっている。つまり、よだかは、醜く、弱く、誰も怖がらない。鷹が名前を変えるように迫る理由は、「鷹」と名前に付くだけで迷惑なくらい、本来の鷹とイメージが違うからである。同じように、土神も「神という名こそついていましたが」非常に汚く、神様のイメージからはかけ離れていると描写されている。

だが、よだかと土神が明らかに違う点は、土神は不思議な力を持ち、神という地位による“絶対的な権力”を持っていることである。樺の木や狐は、土神を心の中で恐れ、土神も自分が神だというプライドを捨ててはいない。むしろ高いプライドを持っている。

それに対して、狐は嘘つきである。小さな嘘で、人を困らせたりするような性質ではないと語り手は言う。狐の嘘は、樺の木にロマンチックな夢を見させ

るような嘘である。自分が格好良く見られたいという理由から、持っていないものを持っていると言う。また、狐は樺の木にいつか外国の望遠鏡を見せてあげると言い、またそれとは別にハイネの詩集を持っている。樺の木は懂れの眼差しで狐を見ている。

同時に、狐は樺の木を喜ばせるために言った小さな嘘を後悔する。しかし、狐は心を痛めながらも嘘は止められない。

二人について、童話の中で語り手は次のように評価する。

「たゞもしよくよくこの二人をくらべて見たら土神の方は正直で狐は少し不正直だったかも知れません。」¹⁹

この点について、小沢俊郎は＜恋愛の内包するどす黒さを扱って異色＞な作品と指摘し、嫉妬を止められない土神と都会風に見せたい狐の＜恋ゆえの矛盾＞と分析した。²⁰

確かに、賢治の創作メモでは樺の木は女性となっている。だが、この小説は単なる恋愛の物語ではない。ここで細かに描写されているのは、疎外感を持つ人物と小さな嘘を悩む人物の対立である。

この作品の表紙にあるメモ書き「土神・・・退職教授 きつね・・・貧なる詩人」から分析すると、詩人である狐とは、実際に詩人である賢治自身と重なる。狐は天体に詳しく、望遠鏡を持ち、ドイツ語を読むことも賢治と共通している。

そして、小さな嘘をつく人物を狐という動物にしている。狐は、もともと民話などで一般的に人間を騙すイメージを持つ動物である。²¹その狐に貧なる詩人という職業と生活状況を設定したのである。つまり、詩人には現実世界を生きている人々とは違う生活をし、ある意味で人を欺いている側面があるという状況を「狐と盲目の樺の木」の二者で描こうとしていると言える。詩人であった賢治が、このような狐に自分を重ね併せて記述している点は注目に値する。

それに対して、土神はよだかと同じように疎外感を持つ登場人物である。狐に対して嫉妬し、狐の言うことと対照的なことを述べる狐の言動のアンチテーゼでもある。そして、土神はこのように述べる。

「狐の如きは実に世の害悪だ。たゞ一言もまことはなく卑怯で臆病でそれに非常に妬み深いのだ。」²²

「まこと」は、正直や本当のことという意味で、賢治が追い求めていたもので

もある。

また、栗原敦は「一本の綺麗な女の樺の木」が「北のはずれ」にある「一本木の野原」や「三つ森山」という地名は、一本木野（岩手山東麓）、三つ森山（岩手山東麓の北方）として岩手県に実在すると述べている。その上で、萩原昌好が『土神と狐』論²³で『春と修羅』の第一作集に「一本木野」という詩篇があることを既に指摘しているが、同じく「一本木野」という詩に秋の自然の中で不安や恐れを持って佇んでいる詩人（賢治）の内面が読み取れると述べた。そして、詩人の心の中の浄化の感情と不安との交錯について、『土神ときつね』との共通点を指摘している。²⁴

つまり、賢治は、ロマンチックな言葉を並べ、樺の木に夢を与える詩人の狐の一面を持っていることを自覚している。またそこにはそれに対する迷いがある。また、土神という存在も、よだかの孤独感を抱えた狐のアンチテーゼとしての自分であろう。賢治は家族の宗教である浄土真宗から脱退し、一人だけ法華経の信者になった。死ぬまで家族に改宗を勧めて認められなかった賢治の孤独感と、神としてプライドがあるが認められない土神の疎外感・孤独感は共通している。

こうしたことから、狐も土神も、賢治の精神の一面を反映していると言える。これらの童話の中には、単に女性を巡る恋愛の三角関係が書かれているのではない。栗原敦も指摘したように、この二つの人物の対立は賢治の二つの内面の対立を示していると考えたほうが自然である。そうした狐を土神は殺してしまう。嫉妬という感情から引き起こされる二者の対立は、賢治の二面の葛藤と反発を映しているのである。『よだかの星』のように、対立から逃げることも譲ることもなく、相手と対立し続ける。狐の嘘への後悔と嘘を止められないという矛盾、それに対する土神の感情的な攻撃と土神自身のコンプレックスという込み入った関係から、賢治自身の複雑さが窺えるのである。

3-2. 近代化の都市と自然を残す地方の対立

第二に、狐と土神の対立は“近代化された東京と自然を残す岩手のような地方”の対立として解釈することもできる。狐は南に住み、土神は北・東北に住んでいることから、やや短絡的ではあるが、地理的にも東京と東北（岩手）の位置関係と重なる。

では、なぜ賢治の中で近代化は東京という都市によって代表されるのか。なぜなら、賢治の見た都市の中で、東京が一番身近で一番近代化が進んだ都市だったからである。賢治の家出先が東京であり、またそれ以前にも父親の仕事の関係で東京へ行っている。妹トシも東京の大学へ進学しており、賢治は彼女

を東京まで訪ねている。つまり、東京へ何度も足を運んでいる賢治は、東京に対して何らかの特別の理解と意識を持っていたと考えられる。例えば、『ボラーノの広場』という作品に登場する「わたくし」は、物語の最後に「そして昨日この友だちのいないにぎやかなながら荒さんだトキーオの市のはげしい輪転器の音のとなりの室で」仕事をしている場面が描かれている。²⁵ここで、トキーオ＝東京が登場している。にぎやかながら荒んだトキーオとは、賢治の印象であろうか。このように、賢治は東京と岩手を往復しながら東京の近代化を感じ、同時に、近代化から取り残されているが、なお自然に溢れた故郷の岩手を感じていたと考えられる。

近代化と東京を代表する狐は、「欧州航路での取り寄せ、独乙のツァイスの望遠鏡、ドイツ語、英語、フランス語、ハイネの詩集、赤革の靴、茶いろのレーンコート、夏帽子、顕微鏡、ロンドンタイムス、大理石のシザア、仕立ておろしの紺の背広」といった近代的な事物で飾られている。一方、土神はぼろぼろで汚い。そして、冷たい湿地に住み、「丸太で拵へた高さ一間ばかり」の祠に住む。祠とは、その土地と密着した非近代的な時代から続く信仰である。『新宮澤賢治語彙辞典』によると、土神は通常ツチノカミとって、土地をつかさどる神であるという。²⁶前にも述べたが、物語の場所が岩手に実在するならば、この物語の土神は岩手の土地の神ということになる。

その土神は、狐や樺の木、人間からも恐れられ、絶対的な権力と支配力を持っている。人間には土神が見えなかったと書かれているように、土神は不可視の存在でありながら、狐や樺の木には見えている。また、土神は見えない力によって人間をコントロールすることができるのである。ここで苛められ恐れて逃げていく人間は樵という森と関係の深い職業の人物であり、自然と共に生きている狐や樺の木には土神が見えるが、自然から搾取しながらも自然と離れて暮す人間には土神は見えないといえる。

土神の恐ろしさと力は、さしずめ岩手における人間が完全には支配できない自然の支配力の強さと解釈できよう。自然の力を土神という土地の神（岩手）によって象徴させた点に、賢治と岩手（土地）との関係の深さが見受けられるのである。

また、都会風の格好をした狐は、科学的な知識で樺の木の興味を惹く。自然を代表する土神は、科学では証明不可能な非近代的な質問をする。

「草といふものは黒い土から出るのがなぜかう青いもんだらう。黄や白の花さへ咲くんだ。どうもわからんねえ。」²⁷

だが、非科学的な土神の質問は樺の木に相手にされない。つまり、樺の木は、科学的な狐の“何でも答えを知っていて、説明できる”ところに、感動しているのである。樺の木は、物知りの狐の答えは何でも完璧だと受け止めている。特に自然科学というのは、これまで分からなかった自然現象を明らかにしようとする試みである。科学は、曖昧な自然を明確にすると考えられ、合理的な説明によって人々を納得させる。袴田共之は、「しかも科学はいまだに暗く われらに自殺と自棄のみをしか保証せぬ、」という賢治の一節から、賢治の科学に対する二つの暗い意味を指摘している。²⁸一つ目の意味は、20世紀は発見と発明の時代であったがまだまだ小さな一歩であって、科学が明らかにしたことと現実の世界でのこととの間には大きなギャップが存在したという点である。二つ目には、賢治の頭脳を占めた科学知識は、近代欧米仕込みの外来科学であり、日本の陸である岩手県の現実とのギャップについて賢治は悩まざるを得なかったのである。このように、近代科学や自然科学が万能ではないことは、賢治自身が実感していたことであった。

それを表すかのように、科学的な知識で語る狐は、小さな嘘をついているのである。狐は樺の木に対しては自信を持って色々な話をするのだが、土神が来ると狐と樺の木は怖がる。土神の方は、狐の方が偉いと思ひ、結局狐よりも劣っている自分について苛立たしくて胸をかきむしる。ここでは、何でも軽々と説明してしまう近代科学で飾られた東京に対する半ば驚きと皮肉が込められ、更に、近代化の対極に位置する賢治の住む岩手がいいようなない劣等感と嫉妬に苛まれ、土神のように自分を見失いつつあるのである。

小森陽一は、土神が樺の木の気持ち分からないまま狐と自分を比較することから、比較の基準は土神の自己意識と狐に対する土神の意識との差異に現れることになると述べ、『土神ときつね』の嫉妬という構造で起きる問題は、土神自身が自己意識に自信がないという点にあるという。²⁹そして、土神は狐の外見や装飾にこだわっており、土神自身の外見は非常に汚い。小森陽一は、さらに土神のはだして黒くて長い爪、髪がぼさぼさである点などを指摘し、日清戦争前後をピークに国民的規模で成立する「衛生学」的言動から賢治が土神を汚いと見ているという。

宮沢賢治の作品の中で社会の近代化への皮肉を描いた作品として、『オツベルと象』が挙げられる。機械化によって農民を働かせ、儲けているオツベルという経営者が、ずるがしこい手を使って突然やってきた象を利用し、自分の利益のために働かせるという話である。この作品について、西田良子『『オツベルと象』の再検討』（『日本児童文学』昭49・6）は、時代の影響を受けたく社会批判的、階級闘争的作品>で、白い象の淋しい笑いは<否定し続けて来た<弱

肉強食的争い」や「闘争」を、遂に容認せざるを得なくなった賢治の、現実社会に対する淋しい諦観と論じている。³⁰

この作品では、白い象が抵抗して逃げないように、オツベルは赤い張子の大きな靴やブリキの時計を与えて喜ばせる。だが、実際には靴の飾りには四百キロもある重りが隠されており、また時計の鎖として百キロもある鎖を前足につけるのである。³¹白い象は、いらなそうと思っていた時計を持って、「なかなかいいね」と新しい物を喜んでいる。最初は喜んでいるが、最後にはこの鎖や重い飾りで動けなくなる。

時計に関して言えば、賢治にはこんな思い出があった。彼が中学生の時、父親が銀時計を人前で取り出した際に、自分が金持ちであることを自慢しているように見え、疑問に思って、歌を作っている。³²このことから、賢治の場合、時計は商売人の金持ちが持つ高価なものという意識を持っていたのだろう。また、西洋靴は明治になってから輸入され、赤革の靴というのは、1900年以後日本でも作られ始めたという。³³当時、西洋靴は高価な物であったから、これも一部のみに許された贅沢な商品だったと考えられる。

こうした西洋から輸入された鎖付き時計や西洋靴は、明治の近代化の象徴と捉えることができる。ここでは、近代を象徴するような靴や鎖付き時計が、逆に象を抵抗させないようにする呪縛する重りや鎖になっているのである。

『土神ときつね』において、東京を象徴すると考えられる狐は象と同じ赤革の靴を履いている。つまり、近代化を象徴する商品を身につけているのである。そして、その狐の赤い靴が光るのを見て土神は我に返り狐を殺してしまう。³⁴土神は自分の嫉妬を抑圧しようとしたが、狐に抱く嫉妬は赤い靴によって引き出されてしまうほど、抑圧しきれない強いものであったといえる。

土神とはその土地と切り離せない神であり、この物語の舞台と同じ名前の土地が岩手県に実在することから、岩手の土神であることは既に述べた。そして、狐は西洋の商品を回りに並べ、樺の木の質問に正しく答え、土神はコンプレックスを抱いている。このことから、より明確に土神と狐の対立構造を説明することが出来る。土神は、岩手を愛する〈賢治の中の自然（岩手）〉を象徴し、近代的な物を身につけ気を惹く狐は賢治の中の〈都会（東京）への憧れと近代の虚偽性の認識〉をともに象徴しているといえるのである。

4. 自己犠牲の挫折：よだかと土神

土神、狐はともに賢治の内面を表していると述べた。同時に、賢治の内面で

起きている近代化が進む都市（東京）と地方（岩手）の対立でもあった。

その土神と『よだかの星』のよだかには、共通点が見られる。孤独で疎外されている点、名前と実態の差が問題になっている点については、すでに論じてきた。栗原敦は、土神と狐について「よだかの場合、最後の尊厳である名前までも奪われそうになってなげくが、反対に土神は神の威厳が傷つけられたと怒るのである。」と分析し、この点に自分の死を選ぶよだかと加害者になる土神との違いがあり、「土神も狐もともに作者自身の自意識のかたちだろう。」と述べている。³⁵つまり、無力なよだかが自分の死を選んだことに対して、プライドの高い土神は死を選ぶのではなく嫉妬の衝動から狐を殺してしまうという解釈である。だが、物語のテーマは土神の嫉妬やプライドの問題だけではない。

ここでの本当の問題は、自己犠牲という解決策の挫折である。物語の中心にある土神の嫉妬という感情を、よだかと同じ自己犠牲によって解決しようと試みることが物語の重要な点になっているのである。これは、『よだかの星』から『グスコブドリの伝記』へと続く自己犠牲というテーマと同じである。

以下、詳しく引用する。

秋になり、土神は上機嫌になる。そして、次のように考えるようになる。

「今年の夏からのいろいろなつらい思ひが何だかぼうっとみんな立派なもやのやうなものに変わって頭の上に環わになってかかったやうに思ひました。」³⁶

「わしはいまなら誰たれのためにでも命をやる。みみずが死ななけあならんならそれにもわしはかかってやっていゝのだ。」土神は遠くの青いそらを見て云ひました。その眼も黒く立派でした。³⁷

つまり、プライドを捨て自分の感情を殺すこと、孤独な自分を受け入れようとした。更に、狐と樺の木の間が良くてもいいのだと自分を納得させようとした。これは、欲や感情を昇華して自分の感情を殺すという意味において、一種の自己犠牲であると考えられる。よだかやグスコブドリにおいて命が捧げられたように、上記の引用にみられるような誰にでも命をやるという他者への尽くし方は、注目に値する。だが、この言葉の直後、土神は狐の赤い靴を見て衝動的に狐を殺してしまう。

従って、この作品は土神の嫉妬から始まり、土神が全てを受け入れ自己犠牲へ向かおうとしたが結果的に挫折してしまうという構成になっている。土神はよだかと異なり、目的や他者のために自分を殺すことが出来なかった。また、自己犠牲の最終形であったブドリのように人を救うための死からも遠い。こう

したことから、土神は自己犠牲を試みたものの自己犠牲によって解決することが出来なかった登場人物といえるのである。

だからこそ、物語の語り手は自己犠牲に失敗した土神について多く描写し、狐よりも相手を殺す方へ向かった土神の感情に重点を置いているのである。この点を考えた場合、前にあげた自己犠牲の死の二作品と『土神ときつね』は、同じテーマの元で考えるべきなのだとはいえる。

5. まとめ

『よだかの星』と『グスコブドリの伝記』は、主人公の自己犠牲が達成され、死を迎えるという童話であった。そして、同じように主人公が自己犠牲を試み挫折した作品として『土神ときつね』を挙げることができる。この自己犠牲というテーマは、『よだかの星』や『グスコブドリの伝記』でもみられたように、賢治の童話の中で何度か登場するテーマなのである。ただ、『土神ときつね』を他の作品と比べて異質に感じる原因は、二人の人物の激しい対立と殺人という「自己犠牲の挫折と結果」にある。

『土神ときつね』では、なぜ『よだかの星』のように自己犠牲でもって問題を解決できなかったのか。それは、ここで論じたように、狐と土神の対立は賢治の中で生じた次のような二重の対立だったからである。

第一の対立は、ロマンチックな詩人とアンチテーゼとしての土神、そして第二の対立は、近代的な物を身に付け気を惹くく都会（東京）への憧れと近代の虚偽性の認識と岩手を愛するく賢治の中の自然（岩手）である。狐と土神が象徴するこれらのものは、どちらも賢治が愛したものであり、どちらも自己（自分）の一部である。だからこそ、土神と狐の対立は、『よだかの星』のように自己犠牲によって解決できる葛藤ではなかった。その結果、強い嫉妬によって衝動的な行動を起こす土神が生まれたのである。

『土神ときつね』は、一見恋愛の嫉妬のように描かれているが、裏に賢治の内面で起きているく詩人としての自分についての葛藤とく近代化する都市と自然の岩手」という二つの強い対立がある。そして、自己犠牲という解決が受け入れられない葛藤と挫折が映し出された作品である。この点が、土神の激しい感情の露出と異様な結末を引き起こしていると言えるのである。

注

- 1 天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』新書館 1996年 75頁
- 2 編者佐藤泰正「宮沢賢治童話辞典」『宮沢賢治必携』學燈社 1999年 130頁
- 3 修士論文で扱った作品は、『ひかりの素足』『双子の星』『貝の火』『注文の多い料理店』『よだかの星』『水仙月の四日』『土神ときつね』『オツベルと象』『なめとこ山の熊』『グスコブドリの伝記』である。また、賢治の作品に見られる自己犠牲については、西田良子も他の作品を挙げて指摘している。
西田良子、「『オツベルと象』の再検討—賢治童話の系譜におけるその異質性」、『日本児童文学』20(6)号 児童文学者協会 1974年 26頁
- 4 賢治が生きていた間に、東北で大きな飢饉があった。
*1902年（明治35年）9月
岩手県下大暴風のため農作被害。この年、県下凶作、米作収穫21.9万石、平年より34万石減収。青森・岩手・宮城・福島各県では平年作の50%前後の収穫。
*1903年（明治36年）
この年、前年の凶作で東北地方飢饉。
*1905年（明治38年）
7月県下低温、霖雨ながあめ、この年県下大凶作、米収高19.3万石。平年に比し、37.9万石減収。
*1906年（明治39年）、東北地方大飢饉。
宮城・岩手・福島県の窮民を公営土木・耕地整理・植林事業・魚網製作などに就業させ、救済をはかる。
*1907年（明治40年）、4月15日
関豊太郎、東北凶作と海流の関係を究明。
（「凶作原因調査報告」＜官報＞）
引用：『[新] 校本宮澤賢治全集第十六卷（下）補遺・資料 年譜篇』、
編者：宮沢清六他 筑摩書房 2001年 39-51頁
- 5 岡屋昭雄『宮澤賢治論—賢治作品をどう読むか—』桜楓社 1995年 282頁
- 6 有名な詩に『永訣の朝』がある。
- 7 恩田逸夫『宮沢賢治論3』
『注文の多い料理店』刊行趣意書の前文：現代語訳より 東京書籍 1981年 5頁

- 8 恩田逸夫『宮沢賢治論3』東京書籍 1981年 14頁
- 9 『グスコブドリの伝記』宮沢賢治全集8 筑摩書房 1986年 270-271頁
- 10 千葉一幹「グスコブドリ」、『宮沢賢治ハンドブック』天沢退二郎編 新書館 1996年 67-68頁
- 11 『グスコブドリの伝記』を書いている賢治の様子について、宮沢清六が次のように語っている。

「昭和七年の春、『児童文学』という季刊の本に寄稿するために、『グスコブドリの伝記』を書き直すのをそばで見れていたが、病床でも大きな綺麗な字でどんどん書きながら、ちょっと笑ったり、冗談を言ったりしていた。」

賢治が自信を持ち、楽しんでいたことが窺えるのである。

引用：宮沢清六『兄のトランク』筑摩書房 1991年 263-264頁

- 12 宮沢清六『兄のトランク』筑摩書房 1991年 263-264頁
- 13 千葉一幹「グスコブドリ」、『宮沢賢治ハンドブック』天沢退二郎編 新書館 1996年 67-68頁
- 14 松岡幹夫は、賢治のこの〈自己犠牲の精神〉について、法華経信仰を通じて学んだことは明らかであると述べている。その上で、賢治の自己犠牲の精神には、明らかに法華経と違う点があるという。それは、賢治の自己犠牲は、〈自己への罪悪性への深刻な嫌悪〉があり、『法華経』にはそのようなく自己嫌忌〉は見られない。つまり、子供のころからの〈真実的な自己の罪悪視に基づく自己否定的な救済信仰だったと言わざるを得ない〉と言っている。

引用：松岡幹夫『日蓮仏教の社会思想的展開—近代日本の宗教的イデオロギー—』東京大学出版 2005年 282-283頁

- 15 松岡幹夫『日蓮仏教の社会思想的展開—近代日本の宗教的イデオロギー—』東京大学出版 2005年 282頁
- 16 西田良子「グスコブドリの伝記 悲願の結晶」、『國文學』學燈社 第27巻3号（昭和57年2月） 111頁
- 17 編者：宮沢清六他『[新] 校本宮沢賢治全集第十六巻（下）補遺・資料 年譜篇』筑摩書房 2001年 306頁
- 18 『土神ときつね』宮沢賢治全集6 筑摩書房 1986年 109-110頁
- 19 『土神ときつね』宮沢賢治全集6 筑摩書房 1986年 110頁
- 20 編者佐藤泰正「宮沢賢治童話辞典」『宮沢賢治必携』學燈社 1999年 130頁
- 21 原子朗『新宮沢賢治語彙辞典』東京書籍 1999年 183頁

- 22 『土神ときつね』宮沢賢治全集 6 筑摩書房 1986年 114頁
- 23 萩原昌好『『土神と狐』論』、萬田務・伊藤眞一郎編者『作品論宮沢賢治』
双文社 昭和59年
- 24 國文學編集部『賢治童話の手帖』學燈社 1990年 132頁
- 25 『ポラーノの広場』宮沢賢治全集 7 筑摩書房 1985年 232頁、原子朗『新
宮澤賢治語彙辞典』東京書籍 1999年 511頁
- 26 原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍 1999年 478-479頁
- 27 『土神ときつね』宮沢賢治全集 6 筑摩書房 1986年 114頁
- 28 袴田共之「肥料設計」、『宮沢賢治ハンドブック』天沢退二郎編 新書館
1996年 162-163頁
- 29 小森陽一「賢治の殺意—『土神と狐』を読む—」『週間朝日』101(28)号 朝
日新聞社 1996年 78-89頁
- 30 編者佐藤泰正『宮沢賢治必携』「宮沢賢治童話辞典」學燈社 1999年 93頁
西田良子『『オッベルと象』の再検討—賢治童話の系譜におけるその異質
性』、『日本児童文学』20(6)号 児童文学者協会 1974年 26頁
- 31 『オッベルと象』宮沢賢治全集 8 筑摩書房 1986年 186-187頁
- 32 編者：宮沢清六他『[新] 校本宮澤賢治全集第十六卷（下）補遺・資料 年
譜篇』筑摩書房 2001年 56頁
- 33 原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍 1999年 211-212頁
- 34 『土神ときつね』宮沢賢治全集 6 筑摩書房 1986年 124頁
- 35 國文學編集部『賢治童話の手帖』學燈社 1990年 132頁
- 36 『土神ときつね』宮沢賢治全集 6 筑摩書房 1986年 122頁
- 37 『土神ときつね』宮沢賢治全集 6 筑摩書房 1986年 123頁

参考文献

- 恩田逸夫『宮沢賢治論 3』東京書籍 1981年
- 岡屋昭雄『宮澤賢治論—賢治作品をどう読むか—』桜楓社 1995年
- 松岡幹夫『日蓮仏教の社会思想的展開—近代日本の宗教的イデオロギー—』東
京大学出版 2005年
- 宮沢清六『兄のトランク』筑摩書房 1991年
- 編者：宮沢清六他『[新] 校本宮澤賢治全集第十六卷（下）補遺・資料 年譜
篇』筑摩書房 2001年